

谷本奈穂、飯塚理恵編著（晃洋書房、2025年）

きれいはいまもゆれている 外見・身体・アイデンティティの交差点

西倉 実季*

本書は、社会学、哲学・倫理学、ジェンダー研究などの多様な学問的背景を持つ研究者たちにより、「現代における『美容』というテーマの研究を、大学生や初学者にも理解しやすいかたちで提示することを目的として」（231頁）編まれた論集である。「美容」の人文・社会科学研究の蓄積が十分ではないなか、美容実践をめぐる現象を把握するための視点や手法を自ら切り拓いてきた、主として若手研究者たちの成果が収録されている。

本書は、「理論パート」（第1章～第3章）と「実践パート」（第4章～第6章）、および各パートの後ろに2本ずつ配置された合計4本のコラムから構成される。理論パートでは、現代の美容実践を把握する際に不可欠な理論的視座が提示されるとともに、今後の議論を進展させていくうえで基盤となる概念の整理がなされている。第1章の永山論文は、美容実践に関する従来のフェミニズム／ジェンダー研究の隘路であった「構造の抑圧／個人の主体性」という二項対立を発展的に解体する試みである。重要文献を渉猟しつつ、新自由主義下で多層的な格差を生み出しながら個々人に巧みに作用する社会的な力を析出するのに有効な視座が提示されている。今日の美容実践について考えようとするすべての者の共通土台となるべき論考である。第2章の亀岡論文は、曖昧に多用されている「ルッキズム」の用法を4つに分類し、それぞれの立場が何を問題視しているのかを哲学的に考察している。本章の見取り図に基づけば、ルッキズムをめぐる議論の混乱は、各論者がルッキズムのいかなる点を悪とみなしているのかという焦点の相違に由来することが明確となる。今後の議論の深化に向けた重要な地ならしであり、実践的意義を併せ持つ論考である。第3章の飯塚論文は、日本におけるアンチエイジング美容実践に着目し、「治療」概念の濫用・混用によって、本来はエ

ンハンスメントであった実践が医療化される問題を検討している。シワやシミの除去が病気の治療とみなされる社会が到来すれば、老化は克服されるべき人間の障壁と認識されることになる。「美容」というテーマがトランスヒューマニズムめぐる倫理的課題と接続することを示す射程の広い論考である。

実践パートでは、質的・量的社会調査によって得られたデータの分析をもとに、現代の具体的な美容実践が検討されている。第4章の永山論文は、美容職従事者を新自由主義的な美の規範と最前線で交渉するアクターとして位置づけ、インタビュー調査を通じて、そうした規範への彼女たちの順応と抵抗の様相をつぶさに描き出している。A.マクロビーらのポストフェミニズム論を理論的枠組みとしつつも、美容職女性自身の経験とその解釈に注目することで、美の規範の再生産のほころびとも言いえる側面を見出している。第5章の谷本論文は、アンケート調査とインタビュー調査を併用することで、男性の美容整形の動機や特徴を多角的に考察している。男同士の競争や仕事上の達成のために美容整形をする一方、女性を含む多様な他者に「見られる」存在として自己を認識しているという両義性をとらえる分析により、男性の美容実践がジェンダー規範の保持と変容とが同時に生起するアリーナであることが示されている。第6章の小平論文では、韓国の男性軍人に向けた化粧品広告の内容分析を通じて、2010年代以降における男性の美容実践の変遷を跡づけている。スキンケアやメイクアップなどの美容実践は、旧来の「男らしさ」を体現する男性軍人という存在と相容れないように見えるが、異性愛を前提とするヘゲモニックな男性性や自律的な主体としての自己管理を要請する点において、むしろ整合的であることが指摘される。

* 早稲田大学文学学術院教授

4本のコラムはいずれも、外見や美容をめぐる今日の事象にアプローチしている。メタバースは現実の外見評価を克服しうるか、SNS空間は美容実践への意識をいかに変容させるか、男性の化粧や脱毛は既存のジェンダー規範をいかに再編するかといった新規の問いが提起されている。

本書の最大の功績は、初学者を主たる読者として想定し、外見や美容に関する人文・社会科学的研究の主題と方法の多様性と豊かさを提示している点にある。近年、外見やそれに関わる美容実践への社会的関心の高まりを背景に、これらのテーマを卒業論文等で扱おうとする大学生は少なくない。しかし、初学者が参照しうる日本語の文献はきわめて限られており、多くの学生が、日常生活の中で抱いた問題関心を学術的問いへと練り上げる過程で苦心している。本書に収められた各論考は、美容をめぐる主題の幅広さを示すと同時に、人文・社会科学の視点からそれらを探究するとはいかなる営みであるのかを具体的に提示している。本書の執筆者たちが、美容をテーマに研究している者同士の出会いを通じてエンパワーされたように(231-232頁)、本書からの学びは多くの初学者にとってもエンパワーメントの契機となるに違いない。

主題の幅広さのなかでも、コラムも含めて半数近い論考が男性の美容実践を取り上げているのが特徴的である。「見る主体＝男性／見られる客体＝女性」というジェンダーの非対称性を背景に、これまでの研究が関心を向けてきたのはおもに女性の美容実践であった。これに対して本書は、視野を男性に拡大しつつ、外見や美容をめぐる男性の意識や経験は上記の非対称性を前提とする従来の研究成果を踏襲したのでは十分に理解しえないことを説得的に論証している。

方法については、実践パートおよびコラムにおいて、インタビュー調査やアンケート調査などの代表的な社会調査法に加えて、マスメディア(雑

誌)やソーシャルメディア(YouTube)の内容分析およびテキストマイニングなどの手法も採用されている。理論パートでは、私たちが自明視している事柄を改めて問い直す哲学的分析の重要性が十分に発揮されている。主題に即した方法の選択という点においても、本書の各論考は初学者にとって有益な指針となるだろう。

本書で惜しまれる点としては、論考間に相互の矛盾とまでは言えないものの、整合性に欠けるように見受けられる箇所があることが挙げられる。とくに、理論パートで提示された視座が実践パートでどのように活かされているのか、両者の接続が必ずしも明瞭ではない。たとえば、永山(第1章)が指摘する新自由主義下において美容実践が帯びる性格——美的起業家精神のもとで「個人の自由な選択とされつつも、実際には市場、メディア、ジェンダー規範によって方向づけられ」ている(16頁)——を踏まえるならば、谷本(第5章)が美容整形の動機として提示している「個人」の満足と「社会」的影響という二分法は再考の余地があるのではないか。また、同じく永山がインターセクショナリティ概念を通じて指摘する美容実践をめぐる格差を、実践パートの各論考がどのように受け止めているのかについても見えにくかった。

各論考がそれぞれ独立した研究成果であるとはいえ、研究会というかたちで進行したプロジェクトであったことを考えるならば、論考間の調整がさらに試みられてもよかったのではないか。いささか無いものねだりではあるが、二部構成の意義を十分に示すためにも、パート間の接続にはいっそうの工夫が求められたように思われる。こうした理論と実証(実践)の架橋は、本書に限らず、外見や美容を論じる研究全体に通底する課題でもある。その意味でも、本書は外見や美容をめぐる研究の現在地と今後の課題を浮かび上がらせた重要な成果である。